2011 年 10 月 7 日

石川県土木部公園緑地課　御中
石川土木総合事務所　御中
白山市子育て支援課　御中

2011 年度
関西学院大学　総合政策学部　久野ゼミ
石川県白山ろくテーマパーク夏季実習の報告書

実施主体：関西学院大学 総合政策学部 久野ゼミ

受入主体：石川県白山ろくテーマパーク指定管理者
株式会社向川外樹園

協力：株式会社クロス･クリエイティブ･コア
（関西学院大学 総合政策学部 リサーチ･コンソーシアム所属）

[報告書目次]

はじめに　P3

１．2011 年度　白山ろくテーマパーク実習における体制、場所、行程等 (P4～P5)

1-1　実習参加メンバーの構成…p4

1-2　指定管理者側受入体制…p4

1-3　実習場所…p4

1-4　宿泊場所…p4

1-5　実習行程…p5

２．実習内容の報告　(P6～P25)

2-1　9 月 12 日(月曜日)･実習初日…p6

2-2　9 月 13 日(火曜日)･実習二日目…p7～p8
2-2-1　『キッズすくすく園芸体験』に向けた準備…p7～p8
2-2-2　シルバー人材センターの皆さんとの共同作業…p8
2-2-3　藤棚清掃…p8

2-3　9 月 14 日(水曜日)･実習三日目『キッズすくすく園芸体験当日』…p9～p19
2-3-1　園芸体験実施までの経緯…p9～P10
2-3-2　『キッズすくすく園芸体験』の実施報告…p11～P19

2-4　9 月 15 日(木曜日)･実習四日目『政策提案発表会』…p20～p23
2-4-1　政策提案発表会…p20～p22
2-4-2　懇親会…p22～p23

2-5　9 月 16 日(金曜日)･実習最終日…p24～p25

３．総括 - 白山ろくテーマパーク実習の意義 -　(P26～P27)

おわりに　(P28)

【作成者】
関西学院大学　総合政策学部
リサーチ･コンソーシアム[1]所属
野畠章吾[2]

1　関西学院大学 総合政策学部 リサーチ･コンソーシアムは、同学部に設置された産官学研究協力機構。

2　㈱クロス･クリエイティブ･コア 代表取締役／白山ろくテーマパーク実習引率者

はじめに

本報告書は、2011 年 9 月 12 日から 16 日までの 5 日間、石川県白山ろくテーマパークで実施された『関西学院大学 総合政策学部 久野ゼミ 白山ろくテーマパーク実習』の内容を報告するものです。実習前にお渡しした『実習計画書』と重複する部分もございますが、石川県土木部様、石川土木総合事務所様、白山市子育て支援課様におかれましては、何卒ご一読下さいますよう宜しくお願い申し上げます。

本年度の白山ろくテーマパーク実習につきましては、実施以前に想像していた成果をはるかに上回る成果があったように感じております。これは一重に、石川県土木部様、石川土木総合事務所様、白山市子育て支援課様の温かいご支援のお陰です。今後とも、本学部の研究活動にご協力を賜れますよう、伏してお願いを申し上げ、本旨に移りたいと存じます。

なお、本報告書は、実習の引率を致しました、私、野畠章吾が作成致します。計画書は実習生が主となり作成致しましたが、今回の報告書は実習生の活動に対する評価の側面もございますので、ご了承頂ければと存じます。また、本旨につきましては誤解なく内容をお伝えするため、あえて敬語、丁寧語、敬称の使用を最小限に留めて執筆しております。併せてご了承頂けますよう宜しくお願い申し上げます。

１．2011 年度 白山ろくテーマパーク実習における体制、場所、行程等

1-1　実習参加メンバーの構成

代表：久野ゼミ４回生　槙香保里
　　同　上　　椿本くるみ
　　同　上　　和田美香
　　久野ゼミ聴講生　和田真莉恵（龍谷大学 経営学部 ４回生）
　　久野ゼミ３回生　上野紗恵
　　同　上　　大隅冴子
　　同　上　　河内泉希
　　同　上　　田中志帆
　　同　上　　常盤明日美
　　同　上　　渡部寛之

引率：関西学院大学 総合政策学部
　　リサーチ･コンソーシアム所属　野畠章吾
　　＊㈱クロス･クリエイティブ･コア　代表取締役
　　＊修士（総合政策）／関西学院大学大学院 総合政策研究科 OB

※9 月 15 日～16 日のみ現地入り
　　関西学院大学 総合政策学部教授 久野武
　　＊専門は、環境政策、循環型社会論など
　　＊環境省 OB

1-2　指定管理者側受入体制

全体統括：　㈱向川外樹園　　部長　　澤田和幸
業務指導：　　同上　　公園センター所長　中村一彦

他、㈱向川外樹園の向川茂社長はじめ、同社従業員、ならびに公園センター職員から多くのサポートを受けた。

1-3　実習場所

石川県白山ろくテーマパーク　吉岡園地・吉野園地

1-4　宿泊場所

瀬女高原スキー場･瀬女コテージ村　〒920-2331　石川県白山市瀬戸丑 114-1

1-5　実習行程

9 月 12 日	昼過ぎ　白山ろくテーマパーク到着。 公園センターに挨拶後、1 時間ほど指定管理者による昨年からの 1 年間の公園マネジメントについて講義。講義終了後は近隣探訪、瀬女高原コテージ村チェックイン。
9 月 13 日	午前中から、翌日の園芸体験の打ち合わせと準備(山本氏指導のもと) 【作業内容】 ・園芸体験時に使用する花壇の耕作、除草、整地 ・防虫ネット用意　等… ・園芸体験時の配布物、お土産、名札等の準備 ・プロジェクターセッティング、音響準備　等… 園芸体験準備とは別に園内作業を地元シルバーの皆さんとともに行う。
9 月 14 日 園芸体験 当日	午前 ・10：00 から園芸体験『キッズすくすく園芸体験』スタート 昼前に終了(オリエンテーション含む) 【体験内容】 ・大花壇で種まき、水やり、防虫ネットはり ・解散時に、絵本 or お土産と次回の案内配布 午後 ・園芸体験の今後のフォロー(満足度調査集計等) ・夕方フリータイム
9 月 15 日	午前 ・園内作業の手伝い 午後 ・提案発表会準備 ・公園マネジメントへの提案発表会 (関西学院大学 総合政策学部教授 久野武先生、来園) ・夕方　吉野園地にて懇親会（BBQ）
9 月 16 日	朝　チェックアウト後、帰阪 ・白山スーパー林道経由で白川郷に立ち寄る。
10 月 14 日、15 日 (もしくは上記日程以降) ※	～園芸体験　第二回目～ ・ハツカダイコン、コマツナ収穫、持ち帰り。 ・実習生 4 名が当日現地入り、子供、保護者と触れ合う。

※キッズすくすく園芸体験の収穫ついて、10 月 14 日･15 日であれば実習生が参加出来ることを 9 月 14 日に案内した。
なお、両日都合が悪い場合については、10 月 14 日･15 日以降であれば、都合のつく時間帯に公園センターにお越し頂きたい旨、案内した。

２．実習内容の報告

以降、日程に沿って実習内容の報告を行う。

2-1　9 月 12 日(月曜日)・実習初日

午前 9 時前に所定の場所に集合、2 台の乗用車に便乗し、宝塚、京都を出発。
途中、北陸自動車道･尼御前サービスエリアで昼食、予定通り午後 1 時 30 分を前に、石川県白山ろくテーマパークに到着した。
ここでは、実習生側より挨拶と自己紹介、研究課題の発表を行った。その後、指定管理者による年間活動の報告を講義頂き、特に 3 回生は「指定管理者制度」の考え方、目的について理解を深めることが出来た。

講義に聞き入る実習生

講師を努める指定管理者

この後、公園周辺、白山麓を知る目的で、白山吡咩神社、手取渓谷･綿が滝、鳥越城と周辺部、手取川ダム、白山恐竜パーク白峰を見学の後、瀬女高原スキー場･瀬女コテージ村にチェックイン。
実習生の内、昨年参加していない 3 回生からは、全員が初めて白山麓を訪れ、「地図やインターネット、雑誌だけで想像していたイメージとは異なる」とのこと。様々な媒介を通しての情報と、生の情報（自分の目、耳から直接得る情報）との差異は、今後の研究活動でも注意すべき点であり、有意義な体験となった。

綿が滝の前で撮影

手取渓谷を歩く

2-2　9 月 13 日(火曜日)・実習二日目

2-2-1 『キッズすくすく園芸体験』に向けた準備

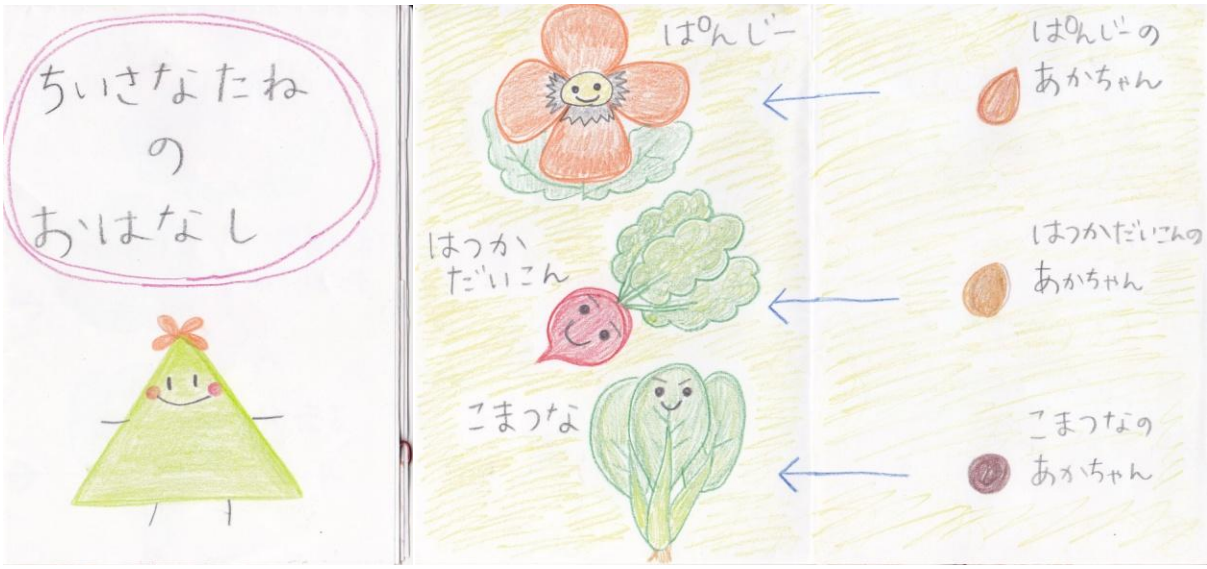
翌日に控えた『キッズすくすく園芸体験』の特設花壇造り、配布物準備、会場準備が活動の中心となった。

園芸体験の特設花壇造りにあたっては、指定管理者が白山市美川で野菜農家を営む山本氏を講師として招聘して下さった。実習生の多くが、関西圏の比較的都市部で生活しているため、プロから農作業を学ぶ貴重な機会となった。特に、現場作業の前に行われた座学では、農家の仕事（どういうことを考えて農業に取り組んでいるか等）の一端を知ることが出来た。

山本氏による講義

特設花壇造り

作業段階では、実習生をグループ分けし、特設花壇造りと同時進行で、園芸体験時に参加者に配布する『絵本』『名札』『シール』等の準備を行った。後者は、単に園芸体験だけを行うのではなく、参加者である子供（幼児）にいっそう楽しんで頂くため、白山市子育て支援課の蔵氏からのアドバイスを参考に企画したものである。



実習生作成の絵本（表紙と内容抜粋）

絵本は、園芸体験当日にスクリーンで上映するため、会場設営時に（受付、音

響設備等）プロジェクターを設置。なお、このプロジェクターは関西学院大学から持参した。

この日の天気予報では、翌日の気温が 30 度を超えると報じられていたため、準備最終段階では、外での作業時間の短縮等を検討し、当日は臨機応変に対応することを、指定管理者、実習生の間で確認した。

2-2-2 シルバー人材センターの皆さんとの共同作業

実習生にとって、今回の実習における印象的な場面の一つとなった。

園芸体験の準備とは別に、地元のシルバー人材センターの皆さんと共に、公園の管理業務に従事した。業務自体は単純な清掃等だが、高齢者と若者の触れ合いという、中山間地域で不足しているコミュニケーションの形を具現化できたことは有意義であった。この時間から実習全体を通して、シルバー人材センターの皆さんと実習生の間で温か味のあるやり取りがあったことは、引率者としても実習の手応えを感じた部分である。

シルバー人材センターの皆さんと

作業中、会話が弾む

2-2-3 藤棚清掃

本公園を印象付ける「藤棚」の清掃を実施した。昨年の実習も夏季ということで藤の開花時期ではなかったが、実習生は藤棚の規模の大きさに驚いた様子だった。公園の“目玉”といえる植物であり、これを PR する企画（藤祭り以外で）にはどのようなものがあるか、実習生同士で話し合いながらの作業となる。また、藤棚の日影を利用して休憩する親子と話すことが出来、花の観賞だけではない藤棚の効果的な活用方法（緑道として、また気温の高い日でも公園を訪れるきっかけになる等）についても考える機会となった。

藤棚の下を清掃

2-3　9 月 14 日(水曜日)･実習三日目『キッズすくすく園芸体験当日』

昨年の実習時、実習生が「園芸福祉」の考え方に基づく企画を白山ろくテーマパークに導入したいとの提案を行い 1 年が経過した。当時の企画内容を初期段階とすると､1 年間の検討･準備期間の中で､主に 2 回の大きな内容の変化があった。これは、実施対象の変更によるもので、実習報告に先立ち、まずこの経緯を報告する。

2-3-1　園芸体験実施までの経緯（実施対象の変更）

【初期段階：2010 年実習、政策提案時】

この段階では、園芸福祉の実施対象を白山麓近郊の高齢者施設やデイサービス施設を利用している高齢者としていた。これは園芸福祉を通して、「外出機会と共同作業による高齢者間のコミュニケーションの創出」を目的としたもので、結果的には白山ろくテーマパークが高齢者福祉に貢献するという意図があった。

この内容について、2010 年度に開催された研究会『リサーチ･フェア 2010（関西学院大学･総合政策学部主催)』で発表したところ、審査を努める教授陣から「高齢化が進む中山間地域の公園であれば若者を呼び込む方が適切ではないか？」という意見が出された。園芸福祉の概念は、園芸を活用して市民生活に彩りを与える、あるいは気持ちのリフレッシュを図るということで、それ自体が難解ということではない。したがって、実施対象を高齢者から若者に変更することは可能であり、以降はこの方向で企画していくことになった。この研究発表会では、複数の教授陣から「提案だけで終わらずに実施に向けて挑戦するように」という激励の言葉があり、これが実習生のモチベーションとなったことが大きな成果であった。

【第二段階：特別支援学校誘致を検討】

若者を実施対象の基本としつつ、園芸福祉の実施効果をいっそう高められる対象について、指定管理者と実習生の間で検討した。その結果、この時点では特別支援学校の生徒を対象とすることで決定した。これは特別支援学校が、学外者と生徒が触れ合う機会、すなわち学外学習の場を求めているということが、実習生の調査から明らかになったためである。

石川県立明和特別支援学校の高等部主任と直接お会いし協議したところ、本件に関心を持って頂くことが出来､学内会議で検討頂くこととなった｡結果的には、既に定められていた学内のスケジュールと折り合いが合わなかったこと、引率する教員数やスクールバスの数を確保できないとのことで見送りとなったが、明和特別支援学校･高等部には、卒業後に園芸作業に従事することを目指すカリキュラムがあり、本件はこのカリキュラムとも合致するということであった。(これとは別に、本件をきっかけとして、明和特別支援学校より㈱向川外樹園に対し、生徒のインターシップ受入要請があり、本社にて 1 週間程度のインターンシップを実施した。)

なお、この第二段階の計画については、研究会『2011 年度　リサーチ･コンソーシアム総会パネルディスカッション（関西学院大学大学院･総合政策研究科主催)』で発表を行った。発表内容については、資料集の縮小版ポスターの通りである。

【第三段階（実施計画）：近郊に住む幼児と保護者を対象に】

明和特別支援学校の誘致が見送りとなったことで、再度実施対象の検討を行ったところ、近隣の児童館とタイアップし、幼児とその保護者を対象とするという案が出された。児童館は、学童保育としての役割がある一方で、同世代の子供（乳幼児～）を持つ保護者同士のコミュニティを形成する場として活用される等、幅広い役割を担っている。そこで、今回の園芸福祉を「幼児とその保護者」を対象に実施すると仮定し、その効果について分析した。同時に、白山市子育て支援課、同課所管の鶴来南児童館の先生方からアドバイスを頂き、以下に列挙したものが園芸福祉の効果として得られるものと判断した。

① はじめての種まき、収穫作業による子供の情操教育[3]
② 幼稚園入園前の子供を持つ保護者への外出機会の提供
（普段は外出機会が少なく屋内にこもりがち。リフレッシュ効果を狙う。）
※②について、俗に“魔の 2 歳児”[4]等と言われる第一次反抗期にある幼児を対象とすることで、保護者のリフレッシュ効果がいっそう高まると考えられる。
③ 家族以外の大人（指定管理者、講師、実習生）と子供の交流機会の創出
④ 保護者間コミュニティの構築

また、今回の園芸福祉を公園事業としての視点で捉えた場合の効果は、以下の通り。

ⅰ.公園利用の促進、および宣伝効果
ⅱ.指定管理者（産）、白山市子育て支援課、および所管児童館（官）、園芸福祉の実施対象となる参加者（民）、関西学院大学 総合政策学部 久野ゼミ（学）の連携による事業展開と今後の発展の可能性
ⅲ.参加者である市民から公園への要望把握

このように、白山ろくテーマパークにおいて、幼児と保護者を対象とした園芸福祉事業を導入することは、公園の利用効果を高める上で有効な手段となると判断し、以降、具体的な計画を練る段階に移った。

なお、先にも述べたが、この第三段階において確固たる実施計画を構築できたのは、白山市子育て支援課の蔵氏、ならびに同課所管の児童館の先生方の多大なる支援があったからに他ならない。

この後、鶴来北児童館、鶴来南児童館、かわち児童館、吉野谷児童館を中心に、定員を 15 組の親子とし、園芸福祉事業のチラシ（チラシ作成時点で『キッズすくすく園芸体験』と命名）を配布して頂いた。

---

[3] 「園芸福祉の活動は…情操教育…幅広い分野での活用が考えられる」NPO 法人日本園芸福祉普及協会 HP より。進士五十八会長（東京農業大学 前学長）のコメントページ下部。http://www.engeifukusi.com/katsudou_g/katsudou_g.html

[4] “魔の二歳児”“恐怖の二歳児”、英語では“Terrible 2”。一般に第一次反抗期の 1 歳半から 3 歳頃の幼児を指す。インターネットで上記の言葉を入れて検索すると、この世代の幼児を持つ保護者からの悩み相談やアドバイス等、多くの関連事項がヒットする。

2-3-2　『キッズすくすく園芸体験』の実施報告

園芸体験のプログラムについては下表の通り。

月日	時間	内容
9月14日 ※雨天決行	AM9:45	受付開始（公園センター入口付近） ・出席確認、参加料徴収、絵本等配布。 ・子供たちに「虫さん・お菓子さん・動物さん」の三種類のシールを渡し、3班に分ける。
	10:15	オリエンテーション開始 ①指定管理者から挨拶 ②「みんなが今からやること」（絵本とスクリーンを使用して説明） ③注意事項（主に熱中症対策）
	10:30	オリエンテーション終了、特設花壇へ移動
	10:40	特設花壇で種まき開始 （指導:野菜農家･山本氏　補助:指定管理者、実習生）
	11:10	種まき後「みんなで歌おう、踊ろう」。 芽が出るようにと願いを込めて、実習生がリードして歌う、踊る。
	11:20	公園センターへ移動。 ①収穫日の案内 ②保護者、満足度調査票記入 ③山本氏からのポット（ハツカダイコン or コマツナ）のプレゼント
	11:30	解散

ほぼプログラムの時間通りに実施出来た。ただ、当日9月14日は、9月中旬にもかかわらず、最高気温が30度を超えることが予測され、実際に午前中から30度近くまで気温が上昇していた。そこで、種まき後には日陰で休んで頂く、また実習生が作業に入ってペースを早める等対応した。

以下、プログラムを追って報告する。

【受付】

この受付は、単に参加者の確認、参加費の徴収を行うのではなく、園芸体験に来られた子供たちの心を掴む作業、すなわち「今から楽しいことがあるのでは？」という期待感を与える役割を担った。これは、子供の期待感の表れは、保護者にとっての安心感につながると仮定し、はじめて公園を訪れる親子でも、この後のプログラムに緊張なく取り組んで頂けると考えたからである。

特に功を奏したのは、種まき作業時の班分けを ABC とするのではなく、「虫さん、お菓子さん、動物さん」といように、それぞれのシールを渡すことで行った点である。子供たちは、シールを貰えたことを喜んでくれたようで、受付の時点で“一つ目の笑顔”を作れたことは、その後のプログラム遂行の効率を上げたように感じる。

公園センター前の受付

来園された子供と保護者

受付の実習生とシール選び

いつの間にか服に「虫さん」シール

【オリエンテーション】

オリエンテーション時に予定外だったのは、来園者の数が予測を上回ったことである。17 組の応募の内、1 組が体調不良により不参加、したがって合計 16 組の親子 2 名ずつ（椅子換算 32 脚）が参加すると予想し、36 脚の椅子を用意していた。しかし、実際には 40 名を越える方が来園され、急遽椅子を追加せねばならなかった。これは、子供 1 名に対し、両親で参加、また祖父母も参加というケースが見られたためで、今後リピーターとして公園に来られる可能性を含めると、公園利用の促進という面では一定の成果があったと考える。なお、後述するが 16 組

中 6 組が今回の園芸体験で初めて本公園に来園されたということであった。
　オリエンテーションでは、はじめに指定管理者が挨拶を行い、以降は実習生の代表者が司会を務めた。メインは、“種まき作業を絵本とスクリーンで伝える”という企画で、小さな子供が退屈しないように配慮したものである。
　また、ここでは待ち時間を利用して、実習生が積極的に子供に話しかけ、「保護者を一瞬でも解放すること」を心掛けた。日中のほとんどを子供と母親 2 人だけで過ごすというケースを想定し、母親のストレスを僅かでも緩和しようという狙いである。これは、満足度調査の結果で「学生との交流」が喜ばれた一因になったと考えられる。

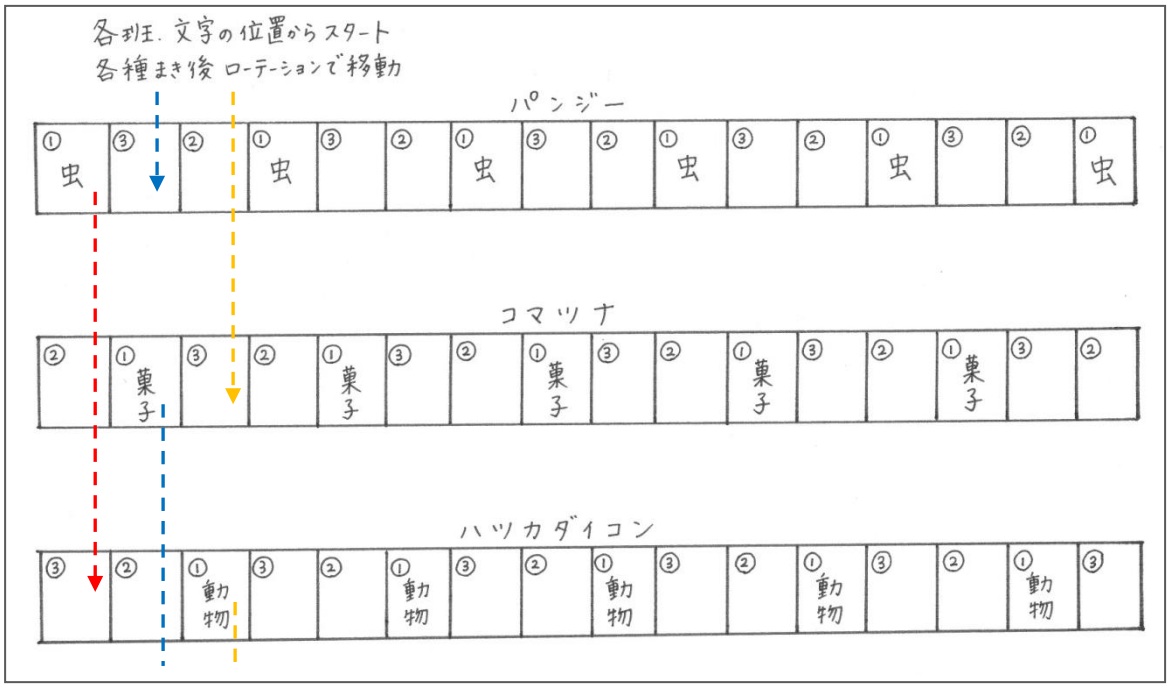
絵本上映の様子

種まき作業を説明中

実習生と子供の交流

待合の雰囲気、テーブル毎に実習生が入る

【種まき作業（園芸体験）】
　オリエンテーション後、全員で特設花壇に移動し種まき作業を開始した。
　畦毎の作業の手順については、下図の打合せ資料で示す通りである。実習生の誘導のもと、パンジー、コマツナ、ハツカダイコンのそれぞれの畦に、3 班に分かれて入って頂き、所定のスタート位置（図中の文字記載位置）から作業を開始した。このシステムは指定管理者が考案したもので、作業中の位置間隔が確保され、隣の人とぶつかることなくスムーズに種まきを進めることが出来た。



園芸体験、進行のシステム（打合せ資料より）※虫、菓子、動物は班の名称

山本氏の指導は、花壇中央部で行い、特に保護者の関心を引くことが出来た。

暑さが最大の不安要素だったが、応援のために来園された白山市子育て支援課の蔵氏、また近隣児童館の先生方に、水分補給等、サポートして頂いたことで、予定よりも時間を短縮して作業を終えることが出来た。ここでも白山市子育て支援課のバックアップを得られたことは心強い限りであった。

ほとんどの子供たちにとって人生初の種まき体験となり、当人はもちろん、保護者にとっても記憶に残るものとなったのではないだろうか。また、しきりに写真を撮影する保護者の姿が見られた。こうした記録写真は、将来的に再度公園を訪れるきっかけとなることが期待される。

作業中、子供たちがバッタやコオロギなどの花壇の虫に驚く様子、興味津々な様子、また種を食べてしまいそうになる子供と保護者の笑顔、実習生の手を握り何かを話す子供…。筆者としては、こうした光景を目の当たりにした時に『キッズすくすく園芸体験』の成功を確信した。

作業体験後、CD プレーヤーを使用して音楽を流し、実習生が歌と踊りを披露。子供たちの気分転換を図った。

実習生に伴われ花壇に向かう

花壇の所定の位置へ

山本氏の指導のもと種まき開始

種そのものに興味津々

写真撮影中の保護者

お母さんの手と

種まき作業全景

実習生の歌と踊りの最中

【種まき作業後、公園センターにて収穫日程等案内】

種まき作業後、いったん公園センターに戻って頂き、収穫日程を案内した。収穫日程は 10 月 14 日以降とし、14 日･15 日の 2 日間のみ実習生が来園する旨を連絡、なおこの 2 日間で都合がつかない場合、14 日以降であれば公園センターで申し出て頂き収穫できることを案内した。

帰り際には、子供と仲良くなった実習生と記念写真を撮影する保護者の姿を目にした。「園芸体験」という一般的なイベントであっても、学生が持つバイタリティーが如何なく発揮されれば、大幅にクオリティーが向上することを実感した。これは、市民が公園に期待している“楽しみの享受”という点にも寄与するものであろう。

帰り際受付でお土産のポットを渡す

ポットを袋に入れて帰宅

お祖父ちゃん、お母さん、実習生と

この日の為に作成した揃いの
T シャツで記念撮影

【満足度調査の結果について】
満足度調査票を保護者に記入頂いた。
結果は以下の通り。

満足度調査結果（太字の数字が回答ポイント）

- 今日のこと

1. 今日は楽しかったですか？
・楽しかった **13**　・まあまあ楽しかった **3**　・どちらともいえない **0**
・あまり楽しくなかった **0**　・楽しくなかった **0**

2. どれが印象的でしたか（複数回答可）
・オリエンテーション **2**　・絵本 **6**　・種まき作業 **13**　・歌 **4**
・参加者同士の交流 **3**　・大学生との交流 **7**　・無回答 **1**

3. 特にお子さんが楽しんでいたのはどれだと思いますか？（複数回答可）
・オリエンテーション **1**　・絵本 **3**　・種まき作業 **12**　・歌 **4**
・参加者同士の交流 **0**　・大学生との交流 **5**

- 今後のこと

4. このようなプログラムがあれば、また参加したいですか？
・参加したい **15**　・どちらともいえない **1**　・参加したくない **0**

5. 参加したいとお答えいただいた方に質問です。参加人数はどのくらいが良いですか。
・今日より多い **1**　・今日と同じ **13**　・今日より少ない **1**

6. どのくらいの頻度であれば、参加したいと思いますか。
・年に１回 **5**　・半年に１回 **1**　・数か月に１回 **9**　・月１回 **2**　・月２回 **0**

7. 扱う植物は花または野菜のどちらにより魅力を感じますか。
・花 **1**　・野菜 **12**　・どちらともいえない **2**　・無回答 **1**

8. 公園に来られたのは何回目ですか。
・初めて **6**　・複数回（5 回以上）**8**　5 回以内 **1**　・無回答 **1**

- **最後に、ご意見ご感想があればご記入ください。（任意回答）**

・学生と子供との交流がよかった　・学生の説明はわかりやすく丁寧だった。
・手を洗うソープがほしい　・学生の笑顔がいい　・小さな年の時に種まきができて有意義だった

設問 1. について、「楽しかった」「まあまあ楽しかった」よりも低い評価は無。これは、企画の全般的な成功を意味している。

設問 2. 3. では、保護者視点で印象的だったこと、子供が楽しんでいたと感じたことについて回答頂いた。その中で「種まき作業」が両方の設問で高いポイントを得たことは、園芸福祉事業としての成果が示された点である。一方で、「学生

との交流」が種まき作業に次ぐポイントを獲得した。園芸福祉の狙いとして、家族以外の大人との交流を挙げていたことを考慮すると、これも成果があった点といえる。また、「絵本」と「歌」についても、大学生との交流には及ばないものの一定のポイントを獲得しており、白山市子育て支援課、同課所管児童館の先生方のアドバイスが活かされた結果となった。

ただ、「参加者同士の交流」という面ではポイントが伸びなかった。したがって、保護者間のコミュニティの構築を目指すという意味では、反省を要すことが分かった。これについては、イベント後のミーティングで「参加者同士でチームを組んで作業することを考えるべき」、「子供だけで行う簡単な作業（ミニゲーム）を取り入れては」という意見が出され、今後のバージョンアップにつなげるべき改善点が発見された。

設問 4．については、企画の成功を意味するとともに、この園芸体験が持つ魅力が十分に伝わったものと判断される。また、企画の継続について、参加者からの要望が把握できたことにも意義があった。

設問 5．6．について、人数は今回程度が理想と運営サイドも考えており、参加者の意見と合致するところである（これ以上多いと目が行き届かない、少ないと企画の実施効果が薄れる）。頻度については、年 1 回～数カ月と回答された方が多く、仮に公園の通例事業として導入したとしても、指定管理者にとって大きな負担となる可能性は低いと考えられる。

設問 7．については、野菜との回答が多く、これは収穫の魅力が際立つからと考えられる。ただ、吉岡園地は“花”をテーマにした公園であり、この点を PR することを考えると、“開花”を“収穫”に劣らない魅力として伝えていく必要があろう。今回は、配布した絵本の末尾に、実習生のアイディアで『パンジーの塗り絵』をセッティングしている。これにより、来春に改めて公園を訪れ、パンジーの開花をいっそう楽しんで頂くことが期待できる。こうした工夫を加えること、また企画を継続していくことで、新たに「開花の楽しみ方」を提案できれば、花をテーマにした公園としての役割を果たすことにつながると考えられる。

設問 8．今回の園芸体験をきっかけに、はじめて公園に来られたのは 6 組であった。今後、こうした参加者がリピーターとして公園を訪れることを考えると、僅かながらでも公園利用の促進に貢献したものと考えられる。また、園芸体験自体が「①種まき⇒収穫②」、「種まき⇒開花③」と、少なくとも 3 回の来園機会を提案しており、リピーター増加が期待される。

総じて、この満足度調査の結果から、今回の『キッズすくすく園芸体験』は「大成功」であったと自負している。ただ 1 点、保護者間のコミュニティの構築を次回の課題に残した点も、実習生にとっては有意義な宿題となった。

【収穫について（10 月 14 日～)】

10 月 14 日･15 日は、実習生 4 名が公園に詰めて収穫に参加された方を案内した。あいにく 2 日間とも雨天で、この日程で収穫に参加する旨を伺っていた 8 組の内、4 組のみの参加となった。なお、翌 16 日は晴天で、7 組の方が収穫に来られた。残りの方は、その後随時収穫のために来園されている。

14 日、15 日は、雨天ではあったが、子供たちは元気に収穫していた。特に、オレンジ色の実習生揃いの T シャツを見つけて、「あー！」と大きな声を出して駐車場から駆けて来る子供の姿は印象的だった。前回の種まきの短い時間の中で、子供と実習生の交流が深まっていたことを実感した。また、両親で参加されるケース（父親はこの日が楽しみで半休を取られたとのこと）も見られ、こちらの父親からは、『種まき以降、子供から「いつ収穫なの？」「今どれくらい育ったの？」としきりに聞かれるようになった。子供が生き物に関心を持つことが出来、非常に良い企画だった』とのコメントを頂いた。

参加された子供たちにとって、“はじめて種まきをした公園”として記憶に残るのであれば、企画者として非常に嬉しく思う次第である。

雨カッパを着て収穫

お父さん、お母さんと 3 人で

2-4　9 月 15 日(木曜日)･実習四日目『政策提案発表会』

2-4-1　政策提案発表会

昨年に続き二回目の政策提案発表会となった。

今回は、パワーポイントデータを持ち込み、これを使用して行うことで前年からのバージョンアップを図るとともに、筆者が実習生の発表に先立ち企画の趣旨を説明、出席者の関心を高かめることに努めた。

発表会のスケジュールは以下の通り。

月日	時間	内容
9 月 15 日	PM14:30	発表会開会（司会:㈱向川外樹園　澤田部長）
	14:35	開会挨拶（㈱向川外樹園　向川社長）
	14:40	発表会に先だって 【発表コーディネート】 『魅力的な公共空間が生まれる一つのカタチ―白山ろくテーマパーク実習を通して―』 （野畠）
	14:50 発表後、 質疑応答	【提案発表 A】 『出陣!白山チルドレン!―白山ろくテーマパークにおける住民参加促進案―』 （上野･大隅･常盤）
	15:15 発表後、 質疑応答	【提案発表 B】 『地域活性化のための 4 つのプログラム―地域貢献する公園づくり―』 （河内･田中･渡部）
	休憩	
	15:45 報告後、 質疑応答	園芸福祉事業『キッズすくすく園芸体験』の実施報告（槙･椿本）
	16:05	講評（石川土木総合事務所）
	16:15	総評 （関西学院大学総合政策学部　久野武教授）
	16:25	閉会（澤田部長）

また、提案発表の内容は次の通りである。

【提案発表 A の概要：上野著[5]】

『出陣!白山チルドレン!-白山ろくテーマパークにおける住民参加促進案-』

白山ろくテーマパークにおいて住民参加を促進し、“公園と住民”の新しい関係の構築を目指す提案である。

住民参加の促進は、第一に家庭で解決できない問題や、地域文化の喪失、地域の治安の悪化など、地域コミュニティが衰退することで生じる問題の回避につながる。第二に旧 5 村を越えた新たなコミュニティの創造や、若い世代が地域の魅力を発見することも期待できる。

我々が提案する白山ろくテーマパークにおける住民参加促進案は、白山麓地域

[5] 実習生３回生　研究発表Ａリーダー

の子供を中心とした公園への住民参加であり、白山ろくテーマパークの既存イベントへの参加はもちろん、終局的に子供を主体（主催者、企画者）としてイベントを企画することを目的とする。さらに、地域の大人には、子供のサポーターとして参加してもらうことで、幅広い年齢層の住民に、公園を基盤とした“コミュニティづくり”に参画してもらう狙いがある。

こうした公園の活用は、“公園と住民”の新たな関係を構築することとなり、同時に地域コミュニティの醸成、維持にも貢献できると考えられる。

【提案発表Ｂの概要：河内著[6]】

『地域活性化のための４つのプログラム-地域貢献する公園づくり-』

我々の提案は、白山ろくテーマパークの利用者に対し、公園の周辺施設の利用を促すことにより、地域の活性化を図る事を目的とするものである。

一つ目は、大学のサイクリング部を対象とした「白山ろくツーリングプラン戦略」である。吉野園地のオートキャンプ場、BBQ 場を 2 泊程度の合宿地として利用し、公園周辺にある手取キャニオンロードを通り、白山麓の観光地を巡るサイクリングコースを提案する。

二つ目は金沢市・小松市といった近郊都市の住民を対象とした「写メ割戦略」である。毎年テーマパーク内で開催される「河内ふじ祭り」の時期は、テーマパーク利用者が増大することに注目し、テーマパーク内の開花した藤を撮影し、周辺施設で提示することで割引・サービスを行うものである。

三つ目は「公園近郊住民向け戦略」を提案した。普段交流の少ない地域の子供に対し、地域同士の交流の場をとして、テーマパーク内で子供向けキャンプを行う。キャンプ中の“地域に纏わるクイズラリー”やイベントは、子供達に地域への愛情を育んでもらう端緒になることを目的として企画する。

四つ目の不特定多数を対象にした「ホームページ戦略」では、指定管理者が運営するホームページに対し、改善点と今後の活用方法を指摘する。

※なお、上記提案発表の使用資料等は、資料集に掲載。

提案発表Ａ 地元の方の質問中

提案発表Ｂ　発表中

政策提案発表の質疑応答では真剣なやり取り、また実習生の研究への今後の期待を込めたメッセージが多かった。地元の方に多数参加頂き、議論も活発であったことで、緊張していた 3 回生は随分助けられたようである

[6] 実習生３回生　研究発表Ｂリーダー

この政策提案発表の後、前日の園芸福祉事業『キッズすくすく園芸体験』の実施報告を行った。公園センターで発表するのが2回目の4回生が壇上に立ったためか、政策提案発表時のような緊張は少なく、出席者の方と笑顔を交わすシーンがあったことが印象的だった。

園芸福祉事業は、発案から実施まで、写真の槙(左)･椿本(右)の熱意で遂行できた。現在は卒業論文執筆中。

発表会の最後には、石川土木総合事務所から講評を頂いた。本実習を評価頂いた他、「白山手取川ジオパーク構想に白山ろくテーマパークがどのように貢献していくか。この点が今後の課題。」という話があり、実習生のうち特に3回生は大いに関心を抱いたようである。また、久野武教授が山陰海岸国立公園の活用検討会のメンバーに入っていることもあり、指導の体制も整っていることから、いずれかの三回生が卒業論文のテーマとして取り上げるものと考えられる。

その後、久野武教授による総評があり、緑道や園道整備の必要性についての発言があった。特に、吉岡園地と吉野園地の間が徒歩で移動しにくいこと、公園と周辺の美しい田園地や渓谷との連携が少ないことなどを挙げられ、ここを改善することで既存の白山ろくテーマパーク（吉岡園地・吉野園地）の魅力が向上するのではないかとの見解が示された。

2-4-2 懇親会

政策提案発表会後、吉野園地に移動し懇親会が行われた。これは実習の打ち上げと、実習生側から受入に対する感謝を述べる場としてセッティングしたものである。なお、食材については指定管理者の好意で、㈱向川外樹園からの差し入れとなった。実習生一同、また引率者としても感謝に絶えない。

また、今回の懇親会では石川土木総合事務所から2名の方に出席頂いた。偶然ではあるが、筆者は石川土木総合事務所の方と会話する機会を得、その際に公園のリスク管理が話題となった。それを隣で聞いていた3回生の実習生は、公園のリスク管理、あるいは公園のバリアフリーといった点に関心を持ち、現在進級論文のテーマとして研究に励んでいる。

地元のシルバー人材センターの方、市民団体の方など、多数の参加者とともに楽しい時間を過ごすことが出来た。特に、実習生とシルバー人材センターの方との間には、今回と昨年の実習を通して、想像以上に親密な関係が生まれていたようである。これは引率者としては嬉しい誤算であると同時に、産官学の連携を図るという実習そのものの目的を、一定達成できたものと考えている。

2時間程度の懇親会となり、閉会前には実習生代表の槙より実習受入に対する感謝の言葉が述べられた。彼女と椿本は、『キッズすくすく園芸体験』の発案者と

して、企画から実施まで大変な熱意を持って取り組んできた。この事業が成功裏に終わったこと、また準備過程の中で多くの方に支援頂いたこと、そうしたものが思い出されたのか、感極まって涙する姿は、懇親会の参加者に感動を与えた。

実習生から感謝の言葉

公園での実習がすべて終了

指導頂いた山本さんとお孫さんと

懇親会前、地元の方と

2-5　9 月 16 日(金曜日)･実習最終日

4 泊 5 日の実習最終日となった。前日から白山市入りしている久野武教授と共に、昨年同様、白山スーパー林道から白川郷に抜け、東海北陸自動車道で関西を目指した。途中、中宮展示館に立ち寄り休憩。ここでは川に入って遊ぶなど、一同、実習中の緊張感から解き放たれた様子だった。

スーパー林道では、昨年は一度も見ることが出来なかった白山をはじめて眺めることが出来た。僅かに雲がかかっていたが、満足のいくドライブとなった。

その後、白川郷へ。一大観光地となっていることに驚いた。昨年はなかった大型駐車場が出来ている等、雰囲気が随分と変わっていた。はじめて訪れた 3 回生は感動した様子だったが、筆者のように複数回訪れていると、こうした一大観光地化には寂しさを覚える。同じ白山の麓にあって、石川県側と岐阜県側では人の入り、景観に大きな違いがあり、逆に言えば、石川県側の白山麓地域に存在する公共空間、拠点、観光地を、岐阜県側とは異なる形で育成することは可能だと感じた。それがオリジナリティとなり、来訪者の魅力に繋がるのではなかろうか。

中宮展示館前の沢で

スーパー林道での記念撮影

2 年目ではじめて見えた白山

白川郷展望台で

名神高速道路の黒丸パーキングエリアにて、帰宅が宝塚以東と宝塚以西になるグループで別れ、解散となった。午後 8 時半には全員が無事に帰宅したことを確認し、今回の白山ろくテーマパーク実習は完了した。

３．総括―白山ろくテーマパーク実習の意義―

これまで述べた通り、2 回目の白山ろくテーマパーク実習は無事に完了した。研究者、実習引率者として、また指定管理者を支援する立場の企業人として、今回の実習を総括する。

久野ゼミ実習の目的は、現場を知るというフィールドワークの実施にある。したがって、基本的には国立公園等の事務所やビジターセンターに出向き、そこで国立公園レンジャーやアクティブレンジャーから指導を受けながら学ぶというカリキュラムが多い。しかしながら、白山ろくテーマパーク実習は、それとは異なる性質の実習であると考えている。これは、実習生自身に強い当事者意識を持たせるという点における違いである。

指定管理者制度は、公の施設の管理運営を民間団体であっても可能とした制度だが、この民間団体の多くは企業というのが現状である。特に、都市公園の指定管理については、公共事業の減少によって、これまで以上の経営努力が求められている造園業者にとって極めて重要な事業と位置付けられている。加えて、都市公園は、他の公共施設以上に多様な役割を担う施設である。樹木等の植栽による都市環境や景観美の維持、広域避難所としての機能、あるいは市民が気軽に使える憩いの場として、時にはイベントや祭事で多数の来園者を集めることもある。このように担う役割が多岐に渡ることで、指定管理者には多方面のノウハウを有することが求められる。とはいえ、実際にはこれら全てのノウハウを有する企業は少なく、企業間の連携や外部委託、市民団体からの支援を得て業務にあたるのが一般的である。

我々の白山ろくテーマパーク実習は、このような状況下にある指定管理者を受入主体として遂行しようというわけである。故に、例えばこの実習で園芸福祉事業を提案、実行しようというのであれば、実習生自らを主催者（当事者）として捉え、指定管理者は他企業や市民団体等と連携して行うイベントと同様のものと考えるべきであろう（学生だからといって特別扱いする必要はない）。そうでなければ、実習生は都市公園事業の本質を現場感覚で学ぶことはできない。このように述べると、学生に随分難しい課題を突き付けていると感じる方がいるかもしれないが、それは今回の実習の成果を見て頂ければ杞憂であることが分かる。

今回の実習の目玉、これはもちろん園芸福祉事業『キッズすくすく園芸体験』の試験的実施であった。このイベントを発案、企画、実施に至るまで、実習生の槙と椿本が主体となって行ったことは、当人たちにとっても、これを支えた他の実習生にとっても大きな経験になった。特に、実施対象の選定と勧誘の段階では、1 歳半から 3 歳の子供と保護者を対象として確定させるまで、高齢者施設や特別支援学校を対象とした企画を変更、断念するといった紆余曲折があった。その後、児童館の協力を得て参加募集をはじめた際も、当初は応募状況が芳しくなく大いに慌てた。しかし、こうした障壁に遭遇する度に、自らの活動を見直し、修正したことは、「当事者意識を持つ」という点で有効であった。実際には、特別支援学校の教諭や白山市子育て支援課の蔵氏といった心強い支援者が登場したことで事態は好転していくのだが、この時点で『キッズすくすく園芸体験』が成功裏に終えられるとは、誰ひとり予測していなかったことだろう。イベントを成功させる過程において実習生が立ち向かった“困難”こそ、全国の都市公園の指定管理者が直面している「集客」と「都市公園の利用効果の向上」という課題であり、その意味では、まさしく都市公園事業の一端を学んだことになる。

筆者は、全国の指定管理者が情報交換等を行う研究会に所属しており、各地の様々な課題を伺い知ることが出来る。特に、「短い指定管理期間では投資した資金が回収できない」、あるいは「自治体の指定管理料削減の方針に嫌気がさす」とい

った発言は、そうした席では挨拶のごとく飛び交っている。確かに、短い指定期間は投資の足枷になるであろうし、指定管理料の削減は民間企業にとっては努力意欲を割く。そういう意味では、制度の運用側にも努力を求めねばならない。しかしながら、指定管理者となる以上、仮にその指定期間を越えて何らかの目標を達成しようとするならば、そのスキームを明示すべきであろう。そのスキームが、本当に事業計画書に盛り込まれているか、説得力のあるものか、そこを問わずして制度の運用ばかりを批判しても状況は改善しない。そして、とりわけ多様な役割を担う都市公園については、多くの主体間の連携が必須となる。こうした体制をどのように構築していくのか、スキームを示すことは指定管理者としての重要な使命ではないだろうか。

今回の『キッズすくすく園芸体験』は、石川県、白山市、指定管理者、実習生、市民が関わり、一つのイベントとして成功させることが出来た。また、実習期間全体を通して、指定管理者や、地元のシルバー人材センターの方と実習生とのつながりを構築できた。こうした主体間の関わりが、一定の時間の中で熟成されていくことで、真の意味での“連携”となり、様々なノウハウが公園マネジメントに発揮されるようになる。指定管理者制度は、民間のノウハウを公の施設運営に導入しようという考え方に基づくものだが、こと都市公園においては、それに加えて「様々な主体間の連携の先に制度導入の成果がある」と、強く認識した 2011 年度の白山ろくテーマパーク実習となった。

おわりに

本旨で述べました通り、『2011年度 関西学院大学 総合政策学部 久野ゼミ 白山ろくテーマパーク実習』の報告を終わります。ご支援を頂いたすべての方へ感謝を申し上げます。

㈱向川外樹園の澤田和幸部長様におかれましては、指定管理期間の最終年度という大変ご多忙な時期にもかかわらず、この実習を受け入れて下さり、心より感謝致しております。実習生10名は、今回の実習での経験、またこの公園での出会いを決して忘れることはありませんし、超就職氷河期と呼ばれる昨今にあって、その時代に立ち向かう逞しさを学ぶことが出来たと考えております。また、公園所長の中村一彦様は、公園を訪れる実習生を毎日笑顔で迎えて下さいました。それが彼らのヤル気となり、今回の実習を成功に導いたことは申し上げるまでもありません。向川茂社長様はじめ㈱向川外樹園の皆様、公園職員の皆様、シルバー人材センターの皆様、昨年からお世話になっている地元の小村様、園芸体験をご指導頂いた山本様にも、温かく歓迎して頂きました。伏して御礼を申し上げます。

石川県土木部公園緑地課、石川土木総合事務所の皆様におかれましては、実習中は事故等、いろいろとご心配をおかけしたことと存じます。そうした中で、この取り組みにご理解とご支援を頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。

白山市子育て支援課の蔵様はじめ、所管の児童館の先生方は、参加者募集のご対応のみならず、当日には応援に駆け付けて下さいました。これが主催者である我々にとって、どれほどの安心感と励みになったことか。衷心より感謝申し上げます。

また、石川県立明和特別支援学校の前川哲昭先生のご尽力、金沢庭材㈱のご支援への感謝も忘れるわけにはいきません。

最後になりましたが、実習生の皆さんの努力に敬意を払います。3回生の諸君は、未経験のことばかり、戸惑うことばかりの準備期間だったと思います。その中で、時に衝突しながらも政策提案発表を完成させたことは立派でした。そして、4名の4回生。3回生の指導をしてくれた和田美香、和田真莉恵は、3回生の代わりに私からの厳しい叱責を受けてくれました。今は、3回生自身が気づいていない部分もあると思いますが、いずれは「実はあの時助けてもらっていたんだ」ということに気がつくはずです。ご苦労様でした。園芸福祉の企画を発案した椿本くるみと槙香保里。槙は実習生代表も努めてくれました。二人の努力は、現実の世界で結実しました。その成果については見事としか言いようがありません。お疲れ様でした。ただし、椿本・槙だけでなく4回生は、まだ学生です。現実社会に飛び出す前の最後の学びとして、この経験を卒論として昇華させられるよう頑張って下さい。久野武先生とともに、素晴らしい論文が出来上がることを大いに祈念しています。

末尾